

我国最初のリウマチ学単行書『儂麻窪斯新論』

の訳編者八杉利雄（一八四七—一八八三）と原著者フリント（一八一二—一八八六）

蒲原 宏

わが国のリウマチに関する単行書は、八杉（榎）利雄が明治五年（一八七二）に翻訳出版した『儂麻窪斯新論』が最初と考える。

（一）『儂麻窪斯新論』とその内容

本書はオースチン・フリント (Austin Flint 1812—1886) の A treatise on the principles and practice of medicine; designed for the use of practitioners and students of medicine, 1868 (第三版) のリウマチの項を翻訳したものである。

『普林篤著 八杉利雄訳 儂麻窪斯新論・起竜館蔵版』明治壬申秋官許とある天・地二巻、黄色表紙、内扉は赤色となっている。

縦十二×横十八センチの小本で、天は二十七丁、地は本文十六丁、附録十六丁 (図①図②)
内容は

「儂麻窪斯新論例言



図1 フリント原著(1868年版)
八杉利雄訳
痺麻室斯新論(明治5年刊)

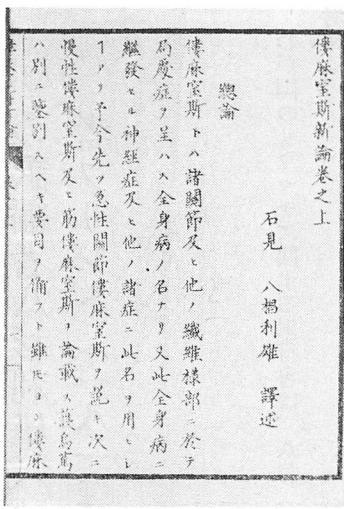


図2 痺麻室斯新論
卷上第1頁

卷之上
痺麻室斯総論

急性関節痺麻室斯

病床所見

病理

原因

察病

預后

処置

卷之下
次急性及慢性関節痺麻室斯

筋痺麻室斯

護烏篤総論

各症処置

痺麻室設護烏篤」

であり、きわめて簡略な内容である。

リウマチについては「痺麻室斯トハ諸関節及ヒ他ノ纖維様部ニ於テ局処症ヲ呈ス全身病ノ名ナリ、又此全身病ニ繼発セル神經症及ヒ他ノ諸症ニ此名ヲ用ヒシ事アリ。

予今先ツ急性関節痺麻室斯ヲ説キ次ニ慢性痺麻室斯及ヒ筋痺麻室斯ヲ論載ス。

護烏篤ハ別ニ鑿別スヘシ要目ヲ備フト雖トモ、ヨク痺麻室斯ト混観シ易キヲ以テ篇末ニ護烏篤及ヒ痺麻室設護烏篤ヲ附

録ス」としてリウマチと痛風を分離して翻訳しているのであるが、現代における分類とは病期の分類が異なるものの、その骨子において、十九世紀中期のリウマチ性関節炎とその類以疾患について妥当な紹介が行なわれている。

本書の例言によって、原典からの翻訳事情がよくうかがえる。

「儂麻塞斯新論例言

一、此書ハ洋曆千八百六十八年驚斯丁、普林篤氏ノ著ハセル病学全書ノ中儂麻塞斯ノ一編及護烏篤ノ一部ヲ摘訳スル者ナリ。其原書諸般ノ病論ヲ措テ独リ此一篇ヲ挙ル者ハ、我皇国ニ此病ノ最モ多キヲ以テナリ。

余、医官ヲ辱フスル事未タ数年ナラスト雖トモ此病ノ為メニ病疾廢人トナル者ヲ見ル事甚タ多シ、心常ニ之レヲ愍ム。故ニ自ラ揣ラス訳シテ以テ世ニ公ニスル、所謂急ヲ先ニスルノ意ナリ。

嘲笑ハ敢テ辞セズ、郢斧ハ伏テ之レヲ乞フ若シ閱者刀圭ニ臨ミ小補アラハ、是レ予カ幸ナリ。

一、訳語ハ専ラ先哲ノ定ムル所ニ倣ヒ敢テ妄訳ヲ下サス。若シ訳例ナキ者ハ多ク原語ヲ用フ。薬量ハ号ノ符ヲ用假用シ時刻ハ彼昼夜平分二十四刻表ニ頼ル

明治五年壬申秋八月

石州津和野 八楯利雄 誌

フリントの一八六八年版からの翻訳であるが、この第三版は、東大・阪大・名大医学部の図書館に所蔵されている。

フリントの一八七三年刊第四版が岡山大学医学部図書館に収蔵されており、これは岡山県医学学校時代に購入されたものである。(図

3)

一八七三年版と八杉氏の訳本と対比してみると、原書の第十章・

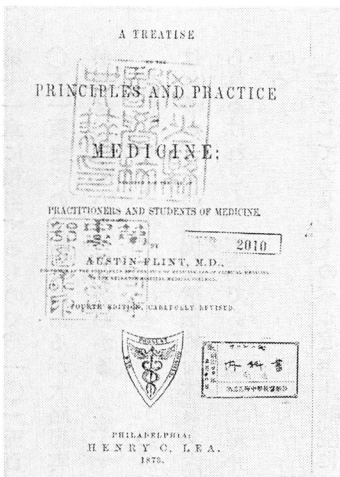


図3 フリントの原著1873年第4版(岡山大学医学部蔵)

(表 I)

Austin Flint: A treatise on the principles and practice of medicine; designed for the use of practitioners and students of medicine (Henry C. Lea, Philadelphia) 1873, 第4版のリウマチの項目次 (第10章より11章, 1015頁~1050頁)

Chapter X

Acute articular Rheumatism

- Clinical History
- Pathological Character
- Causation
- Diagnosis
- Prognosis
- Treatment

Subacute and Chronic Rheumatism

Muscular Rheumatism

Chapter XI

Gout

- Anatomical Characters
- Clinical History
- Pathological Character
- Causation
- Diagnosis
- Prognosis
- Treatment

Rheumatoid arthritis (Rheumatic Gout)

第十一章に相当するもので、一〇一五頁から一〇五一頁までの抄訳ではあるが大略忠実な翻訳が行なわれていることがわかる。(表 I)

急性リウマチ性関節炎とリウマチ熱が同一ではあるが、その原因は遺伝的な体質素因が考えられるけれども、不明であることが紹介されている。

主としてフリントのベルビュー病院における経験とフュルレル (Fuller) の論文および、パリ一小児病院のロゲル (Henri Roger) によるものであるが、心臓合併症の頻度の高いことが紹介されている。

治療剤には主としてアルカリ剤が用いられており、一八四七年にライト (Wright) の提唱した治療法である。

重炭酸ソーダ・重炭酸カリの内服、摂氏百度のアルカリ浴、石鹼、阿片軟膏の塗布、ダビー (Herbert Davies—London) の提唱する発泡膏の貼用療法などがベルビュー病院における経験を

もとに紹介されている。

治療法でもフルレル (Fuller) の学説が豊富に引用されている。

次急性及慢性関節リウマチの項では現在のリウマチ様関節炎が翻訳紹介されており、治療法はアルカリ剤投与とグアヤツクチンキ、甘汞、沃汞、ヨードカリ、水銀軟膏療法などが紹介されている。

また局所治療としてヨードチンキ、微温浴、アルカリ浴、硫黄蒸気浴、温衣浴、鉱泉、温泉療法が有効であるとの翻訳紹介が行なわれている。

筋肉リウマチの項では、総論と(一)頭筋、(二)頸筋、(三)背筋、(四)腰筋、(五)胸筋、(六)肩部ノ筋、(七)四支ノ筋、(八)腹筋、(九)内臓ノ筋組織の九項目の分類と梅毒などの他疾患との鑑別診断、芥子法、電氣流通法、按摩・鎮痛油剤の貼用、水治療、スポンジ浴などについて紹介している。

附録として「護烏篤」(Gout-痛風)篇を翻訳紹介しているが、原典の十一章にあたるもので、その翻訳の主旨を次のように翻訳者は述べている。「痛風」の訳語はあててない。

「訳者云ク、此書ハ表題ノ如ク僂麻室斯ヲ論スル者ニシテ、他ヲ挙ルニ非ス。然レドモ篇中往々護烏篤ニ関スルノ語アリテ其病ノ能ク相類似スルトキハ亦之レヲ説カサルヘカラス。故ニ護烏篤篇中最モ必要ナル條下ヲ摘訳シテ以テ此ニ附録ス」

これは「護烏篤篇 Gout」と「僂麻室設護烏篤 Rheumatoid arthritis—Rheumatic Gout」の二篇からなっている。

「護烏篤」にはその記述内容からみると、現代の「痛風」そのものが翻訳紹介されているが、「僂麻室設護烏篤」については現代の関節疾患の何に相当するかは決し難い。原典での分類名には「リウマチ様関節炎 Rheumatoid arthritis」とあり、又 Rheumatic Goutともあるが、現代のリウマチ様関節炎とはその記述内容が異なるものである。

現代のアメリカリウマチ委員会のリウマチ性疾患の分類からみると、大変に前時代的なリウマチについての知見であ



図4 八杉利雄 (1847-1883)

る。十九世紀中頃のアメリカ及びヨーロッパにおけるリウマチ性関節炎とその類似疾患についての最新の知識が紹介されたのがこの八杉利雄の翻訳『痺麻室斯新論』である。

アメリカの平均水準的なものがフリントの著作の一八六六年の初版の二年あとの一八六八年刊の第三版によって紹介され、それが単行書化されたことは、日本のリウマチ学の初期業績として重要視されて然るべきであろう。

(二) 翻訳者八杉(楯)利雄 (一八四七—一八八三)

弘化四年(一八四七)石見国(島根県)津和野藩の藩士朝倉忠左衛門の子として生まれたが、同藩の八杉利義の養子となる。

長門の萩で漢学をついで江戸、大坂に遊学したが、明治二年大学東校に入り、同三年大学少得業生、ついで中得業生となる。

明治五年文部省九等出仕、ついで六年には八等出仕となり、七年には陸軍二等軍医正として陸軍本病院附第二課詰、従六位となる。

明治十年の西南戦争には東京の本病院から大阪臨時陸軍病院に派遣され傷病兵の診療に従事している。

明治十一年一月三十一日勲四等旭日小綬章並びに年金百三十五円が、西南戦争従軍の功として授与され、陸軍本病院治療課長に補された。明治十四年、陸軍本病院が東京陸軍病院と改称したがそのまま治療課長として在職したが、その年の十二月十七日森林太郎(鷗外)軍医副が治療課長として配属される。

鷗外の『自紀材料』明治十四年十二月十七日の項に、「十七日、治療課長を命ぜらる。課長は八杉利雄なり」とある。

明治十六年一等軍医正となり、同年四月九日小山内健とともに正六位に陞り、熊本鎮台病院長に補され熊本に赴任する。同年十一月三十日会議のため上京中、脳出血により病没する。三十七歳。谷中墓地に葬られる。(4図)

はじめ村松玄庵の次女春子を娶るがさきに病没し、ついで五月女氏を娶り、二男一女があつたが、貞利のみ一人が残る。

遺児の貞利(一八七六一九六六)は東京外国語学校教授で岩波版『露和辞典』の著者、ロシア文学者である。孫の龍一(一九二一現在)は東京工大教授、早稲田大学教授を歴任した生物史学者・生物思想家として知られている。

八杉利雄のその他の著書としては『医事表』明治五年、英蘭堂刊と、藤田正方と共訳の『医用化学』(筆者未見)がある。

(三)原著者フリント(一八二一—一八八六)

アメリカ合衆国の内科医で同時代の医師でこの人ほど数多くの医学校で教職についた人はいないと言われるほど医学教育の場を転々としたが、有能な内科医であつた。

一八二二年十月二十日アメリカ・マサチューセッツ州(Massachusetts)のペーターシエーム(Petersham)に生まれ、一八三三年、二十一歳でハーバード大学を卒業し、ボストンとノザンプトン(Northampton)で開業し、ついでバッファロー(Buffalo)に移り、ここで衛生医官(Medical Officer)となる。

一八四四年三十二歳でラッシュ医科大学(Rush Medical College)の理論及び実地医学(Medical Theory & Practice)教授としてシカゴへ招聘され、一年後バッファローにもどり Buffalo Medical Journal の創刊にたずさわる。

四年間編集主幹とし、またバッファロー大学医学部教授としてその創立に関係した。

また National Medical Convention の代表者となり、学位審査委員を兼ねるが、のちに National Medical Convention がアメリカ医師会(American Medical Association)と一八四七年に改称したのちもこの運営に関係し、一八八四年には会

長に就任している。

その他の教職に就いていた医学校としては Hamburg Canal College; Medical and Surgical Institute and Sanitorium, Buffalo College of Rational Medicine, Homeopathic College of Physicians and Surgeons, Homeopathic Mohawk Medical College, Niagara University Medical Department などがある。

ルイジビル (Louisville) 大学でも一年間教職にあり、一八五六年には再びバッファローにもどり、病理学及び臨床医学教育にあたっている。

四十歳で三つの医学校の教授資格を獲得し、その二年後にはニュー・オルレアズ医学校 (New Orleans Medical School) の教授となり、慈善病院の非常勤内科医を兼務している。かくして夏はバッファローで、冬はニュー・オルレアズですこすという生活がつづいていた。

一八六〇年四十八歳でニュー・ヨークのベルビュー病院医学校 (Belvue Hospital Medical School) の理論臨床医学の教授となり、その後ブルックリン (Brooklyn) のロングアイランド病院 (Long Island Hospital) の病理学及び臨床医学の教授となった。

一八七二年にはニュー・ヨーク医学アカデミー (New York Academy of Medicine) の会長、一八八四年、七十二歳のときにアメリカ医学会長をつとめる。

十九世紀の北アメリカにおいて、最も注目されていた医師の一人であった。特にフリントの業績で注目されるのは、急性伝染病について、コッホ、パストール、リスターの発見以前における前駆的な著作である。

バッファローの衛生医官時代に手がけた仕事で、北ボストン (North Boston) の原始林の中でアメリカカツゲ材で作った小屋に住んでいた住民たちに一八四三年に発生したチフス熱に関するものである。

熱型その他の臨床的観察について実地医家としての、前細菌学時代の推論的著作であるが、急性伝染病研究の基本がよ

く把握されているもので、チフスの発生についてその伝染経路、症状が的確に論述されている。

臨床医家としてのフリントの業績は、「フリントの雑音 Flint murmur」として、大動脈弁閉鎖不全のとき、左室内に血流が逆流するために、拡張期雑音を起こすことは当然であるが、この逆流血液がさらに僧帽弁をも圧迫して僧帽弁膜狭窄の症状をきたすことがある。

このさい拡張期あるいは前収縮期に心雑音をきたすことがあり、この症状に冠名されている。

このようなフリントの医学上の業績は家系的に見ても、その曾祖父が、マサチュセッツのシェウズヴァリ (Shewsbury) で開業医として定住したのが一七七三年という医師として家系の重さがある。

また息子のオースチン・フリント・ジュニア (Austin Flint Jr. 1836—1915) はバッファロー大学の生理学教授、のちにニュー・ヨーク医科大学 (New York Medical College)、『ベルビュー医科大学 (Bellevue Medical College)』のいづれ、コーネル大学医学部 (Cornell University Medical School) に移り、基礎医学者として「フリントの法則 Flint's arcade, Law」で名を残している。孫のオースチン・フリント (Austin Flint) はベルビュー大学医学部 (Bellevue University Medical School) の教職をへて、ニュー・ヨーク大学医学部の産婦人科学の教授となった。

アメリカの由緒ある医学の家系であった。

フリントは一八八六年五月十三日ニュー・ヨークで病没した。七十四歳。

その著書は次のようである。

- (1) Prize Essay. On the variations of pitch in percussion and respiratory sounds (Buffalo, 1852)
- (2) Clinical report on chronic pleuresy ect. (Buffalo, 1853)
- (3) Clinical report on continued fever ect. (Buffalo, 1852, Philadelphia, 1855)
- (4) Clinical report on dysentery (Buffalo, 1853)
- (5) Physical explanation and diagnosis of diseases affecting the respiratory organs (Philadelphia, 1856)

- (6) Compendium of percussion and auscultation etc. (New York, 1869)
- (7) Contributions relating to the causation and prevention of disease, and to camp diseases, ect. (New York, 1867)
- (8) A practical treatise on the diagnosis pathology, and treatment of diseases of the heart (Philadelphia, 1859) (2nd. Ed. 1879)
- (9) A treatise on principles and practice of medicine ect. (Philadelphia, 1866, 5th Ed. 1881)
- (10) Essays on conservative medicine and kindred topics (Philadelphia, 1874)
- (11) Phthisis; its morbid anatomy, etiology ect. (Philadelphia, 1875)
- (12) Clinical medicine; a systematic treatise on the diagnosis and treatment of diseases (Philadelphia, 1879)
- (13) Medical ethics and etiquette, The code of ethics adopted by the American Medical Association etc. (New York, 1883)
- (14) American Cyclopaedia (1872)

などがある。これらの多くの著作のうち、A treatise on principles and practice of medicine (Philadelphia, 1866) はアメリカ医学書の中でも古典的な価値があるとされている評判のよい著書であった。

一八八一年まで五版を重ねているが、初版以来版を重ねることに新しい医学知見が加えられており、一八六八年に第三版、一八七三年に第四版が刊行されている。

日本には、第三版が阪大、名大、東大、第四版が名大、岡山大の医学部図書館に収蔵されていることは前述した通りである。

本書のオランダ語版およびドイツ語版がないことから、八杉利雄の『僂麻塞斯新論』は一八六八年刊行、第三版の英語版から直接翻訳されたものと考えたい。

四 まとめ

(1) 八杉利雄訳の『僂麻塞斯新論』は、リウマチ性関節炎と痛風についての本邦で最初に刊行された単行本であり、かつ明

治初期における英語圏の医学、ことにアメリカ東部の医学を受容したよい例証であると考えられる。

(2) 翻訳者八杉利雄（一八四七—一八八三）の略歴とその子孫八杉貞利（一八七六—一九六六）と八杉龍一（一九二一—現在）のあることを紹介した。

(3) 原著者のオースチン・フリント（一八二二—一八八六）の略歴と業績、子孫について言及した。

(4) 『懐麻奎斯新論』と原著についての内容の比較検討を行なったが、その原著が

Flint, A.: *Treatise on the principles and practice of medicine; designed for the use of practitioners and students of medicine, Philadelphia: F. C. Lea's Son & Co., 1868 and 3rd ed. 1868*

であることを紹介し、かつ原著の日本国内における所在について紹介した。

（県立ガンセンター新潟病院整形外科）

主要文献

- (1) 普林篤著・八椋利雄訳・懐麻奎斯新論 天・地 起竜館蔵版 英蘭堂 明治五年
- (2) 米田正治：島根県医学史覚書 二一八頁 松江文庫(2) 報光社 昭和五十一年
- (3) 大植四郎：明治過去帳 一八一頁 昭和十年
- (4) 和久利誓一：八杉貞利 日本人名大事典(現代) 七八九頁 平凡社 昭和五十四年
- (5) 和久利誓一：八杉貞利日記のしや路 I—Ⅷ頁 図書新聞社 昭和四十二年
- (6) 朝日新聞社編：現代人物事典 一四三頁 朝日新聞社 昭和五十二年
- (7) 八椋利雄輯：医事表 健體部 起竜館蔵版 英蘭堂 明治五年
- (8) 森林太郎：鷗外全集第三十五卷 一〇頁 岩波書店 昭和五十年
- (9) Evans, A. S.: *Austin Flint and his contributions to medicine, Bull. Hist. Med. 32: 224, 1958*
- (10) Flint, A.: *Treatise on the principles and practice of medicine; designed for the use of practitioners and students*

- of medicine, Philadelphia: H. C. Lea's Son & Co., 1868 and 3rd ed. 1873
- (㊦) Flint, A. : Account of epidemic fever which occurred at North Boston, Erie County, New York, during the months of Oct. and Nov., 1843, Amer. J. Med. Sci. 10: 21-35, 1845
- (㊧) Hirsch A. : Biographisches Lexikon der hervorragenden Ärzte aller Zeiten u. Völker Bd. 2. 546. 1962
- (㊨) Talbott: A biographical history of medicine, 1074-1075, 1970, Grune & Stratten, New York & London

“Ryumachi Shinron”, the First Translated and Published Monograph on Rheumatic Diseases in Japan, and Short Biographical Sketches of the Author of the Original Book, Austin Flint(1812-1886), and of the Translator, Toshio Yasugi(1847-1883)

by
Hiroshi KAMBARA

In 1872, chapter 10 and 11 of Flint's book, *Treaise on the Principle and Practice of Medicine* published in 1868, were translated into Japanese and published Privately by Toshio Yasugi in Tokyo. This book is believed to be the first monographical publication on rheumatic disease to show the influence of American medicine in the early Meiji era. The translator, Toshio Yasugi, was born in Tsuwano, Shimane Prefecture in 1847 and died of cerebral apoplexy in Tokyo on November 30, 1883 at the age of 37. He gained his medical education at Daigaku Tōkō, now the Tokyo University School of Medicine, and became a military surgeon. He was promoted to Director of the Kumamoto Military Hospital in 1883. His son, Sadatoshi Yasugi (1876-1966), became a famous linguist in Russian and his grandson, Ryuichi Yasugi (1911-) is a famous evolutionist and biological historian in Japan. Toshio Yasugi published “Ijihiyo”, the standard table of medical data, in 1872, and also published “Iyo Kagaku”, *Chemistry for Medicine*. A short biographical sketch of Austin Flint (1813-1886) and his works influence on Japanese medicine in the early Meiji era, were described.